

偉傑ヤングを偲ぶ

(去る12月8日、天文協會例會にて講演要旨)

今月(12月)15日は米國新天文學の祖 Charles Augustus Young の生誕100年目の日である。ヤングは父も祖父も米國 N. H. 州 Hannover 村の Dartmouth 學院の物理學教授であつた其の家に生れ、1853 年(19才)に大學を卒業、其れから暫く古典學や神學を研究したが、1857 年オハヨ州の Western Reserve 大學教授に招かれ、8ヶ年在任、其の間に半年間軍務に従事したこともある。

1865年、母校 Dartmouth 學院天文臺主任に任ぜられ、こゝに天文家としての活動期に入つたが、時恰も歐米共に新しい「天體物理學」の勃興時代に當り、物理學の種々な武器を携へて天文學界に新人が活躍する時であつたので、ヤングも早くから此の潮流にのり、専ら太陽の分光研究に志した。そして國內國外の諸所へ日食觀測に出張した度數も多い。例へば1869年の日食には Iowa 州 Burlington で太陽の逆出層と、コロナ中の輝線5303 Å と發見し、1870年にはフラシ・スペクトルを發見し、又、紅焰の寫眞撮影に初めて成功した。

此等の成功と共に名聲廣まり、遂に1877年には新設のプリンストン大學天文臺長として招かれ、1905年退隱するまで前後28年間此の地位にあつて、研究に進むと共に漸次米國全學界に雄飛するに至つた。日食觀測は1878年 Colorado 州テンヴァ市で、1887年には歐州ロシアへ、又、1900年には N. C. 州へ行き、何れに於いても成功を納めた。其の他、1874年には支那の北京で金星經過を觀測、1882年には又任地プリンストンで此の種の觀測をした。

上記の如く、ヤングは研究に専心する傍ら、常に多くの後輩を育て、後年米國天文界に多くの人物を送つた。現ヤークス名譽臺長フロスト博士、現プリンストン天文臺長ラセル教授等は其の中の秀才であり、從つて、キルソン山天文臺や、ハーバード大學等にもヤングの系統を引いた人物は多い。又、ヤングの姪 A. S. Young 女史は現に Mt. Holyoke 大學天文臺長である。

ヤングは多くの著書を残したが中にも、“The Sun”は新太陽學の權威書であり、尙ほ“General Astronomy,” “Elements of Astronomy,” “Manual of Astronomy”等是有名である。最後の書は近年ラセル教授等が改訂して“Astronomy”と表題して發表したもので、日本語譯もある。ヤングは1908年に死去した。(山本)